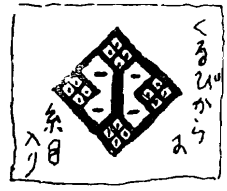


岩木山麓の発掘調査

昭和三三年度の概報

村越　潔

一

岩木山麓四二、〇〇〇町歩にわたる地域は、産業開発特別地域として、国営による総合開発が計画され、いよ／＼来る昭和三五年下半期から工事が実施されることになつた。

これに対し弘前市では、文化財関係諸団体の請願と、文化財保護委員会の要望もあつて、昨昭和三三年市教育委員会に岩木山麓埋蔵文化財緊急調査特別委員会を設置し、開発により失われてゆく遺跡を発掘調査することになつた。

岩木山麓には、現在までに確認された遺跡が三〇箇所ありその内訳は縄文遺跡二三、土師器と須恵器を出土する遺跡五、同一遺跡で縄文土器と土師器、須恵器を出土するもの一、不明一となつている。これらの諸遺跡から昭和三三年度は東麓に所在する湯ノ沢、薬師の二遺跡を選び、指導顧問の八幡一郎斉藤忠、今井富士雄の三先生ならびに山麓緊急調査特別委員会の方々、弘前大学の諸先生の御指導と御協力によつて、青森県文化財専門委員成田末五郎氏、弘前考古学研究会戸沢武と筆者の三名が担当して発掘調査を行つた。

以下その概要を簡単に説明するが、この概報は弘前市教育委員会で先般発行した「岩木山麓古代遺跡」――昭和三三年度発掘中間報告――の第三節遺跡の概要を骨子とし、その後整理の進行によつて判明せるものを追記した。

二

遺跡の発掘は、九月五日から一一日まで湯ノ沢を、九月二〇日から一一月一日まで薬師をと、通算五〇日の長期にわたつたが、天候その他の条件によつて実際の調査日数は二八日であつた。

(1) 湯ノ澤遺跡

本遺跡は岩木山の北東麓、海拔一五〇米に所在する縄文前期、後期ならびに晩期の遺跡である。地籍は青森県中津軽郡岩木村大字百沢字東岩木四二六番地で、通称湯ノ沢開拓地といわれる区域へふくまれる。

昭和二〇年五月開拓者が当地へ入植し、開墾中に多量の石器および土器片を発見した。

和和三三年八月七日われ〳〵は当遺跡の下調査を行い、九月五日から発掘にとりかゝつた。

イ、Aトレンチ　まず木村義男氏所有の菜種畑に巾一、五〇米、長さ三米のテストトレンチを東西に入れた。その結果最初の一二糎内外が耕作された黑色腐植土層で、次に二〇糎程の暗褐色土層がみられ、つゞいて約一五糎の黑褐色土層を通して最後は、赤褐色土層となつていた。まもなく完掘したため東へさらに二米延長し、こんどは北へ一米拡張して掘進めた。すると深さ約四〇糎で南北の径一、〇五米、東西の径九五糎、深さ約二五糎をもつ楕円形の落込みを発見した。このようにテストトレンチも長さが五米に達したので、名称を改めAトレンチとした。

翌六日は、昨日発見した落込みを完掘し、さらにトレンチ東端にみられた住居址の周壁を追求した。その結果、南北の径約五、四〇米を有することがわかつた。

七日からは、第一号住居址内の排土作業を実施し、九日にいたつてその全ぼうが明らかになつた（口絵図版参照）。第四層の赤褐色土層を、四五ないし五〇糎程掘り下げてつくつた竪穴住居址で、南北の径約五、四〇米、東西約五、一〇米のやゝ楕円形のプランを有する。周壁はほゞ垂直で、柱穴は周壁と床面の接点に二四発見され深さは約二〇糎あり、いずれも四〇あるいは、四一度の傾斜をもつて周壁内部に掘込まれていた。炉址は床面のほゞ中央につくられ、南北一、一〇米、東西七〇糎程の径をもち、床面は堅くしまつていたが凹凸がはげしく、全体からみると中央部にむかつて若干傾斜しているように思われた。また床面の東南隅に踏石と、磨石が発見された。

八日はAトレンチの西南三〇米余の地点へ長さ二三米、巾一、五〇米のBトレンチを東西に、第一号住居址の東南約三〇米にCトレンチを南北にそれぞれ設定した。

ロ、Bトレンチ　層は次のごとくである。第一層は黑色腐植土層約一七糎、第二層は暗褐色土層約三〇糎、第三層は黑褐色土層約三五糎、ベースは赤褐色土層であつた。

ハ、Cトレンチ　長さ五米、巾一、五〇米で設定したが、層はさきのAトレンチ、と同様であつた。九日にいたり住居址の輪郭をつかむことができ、一〇、一一の両日はこの住居址に作業を集中した。その結果、径は南北四、六五米、東西

四、八三米のほゞ円形なプランを有する。周壁は南側が谷の傾斜面に露出していたゝめ削られて他壁より低く、わずか一四糎を残すのみであつたが、他の壁は三五～四〇糎あり、ほゞ垂直をなしていた。柱穴は床面に四つ発見され、一五～二五糎の径と二〇糎程の深さをもち、また径が一〇糎に満たないもの六つあらわれた。さらに第一号址と同じく、周壁と床面の接点に六つあり、いずれも四一度の傾斜で周壁内に掘込まれていた。炉址は床面の中央部より若干東南寄りにつくられ、径は南北六五糎、東西六〇糎であつた。この炉址周辺から六つの小柱穴が、六～七糎の深さをもち、炉址をはさんで発見された。床面にはゆるい起伏があり、堅くしまつていたまた床面の北隅に踏石がみられた。

二、遺物　出土した遺物は縄文土器と石器である。これらはいずれも第一層の黒色腐植土層と、第二層の暗褐色土層ならびに、住居址の床面で発見され。第三層の黒褐色土層ではごく少量の土器片が出土したのみであつた。

a、土器　すべて破片であり、量はリンゴ箱分に相当するしかもその大部分は粗製土器で、精製土器は一割にも満たない。年度の調査終了後、即時整理にとりかゝり、本年三月をもつて完了した。その結果、完形二、八割四、五割一の数まで復元し得た。

第一層と第二層から出土した土器は、亀ヶ岡式最後の大洞のA式で、精製土器の大部分は鉢形土器である。口辺には六個の二叉に分岐した波状突起をめぐらしたもので、中には一例だがその突起に動物の頭部を模したものもある。他の部分の装飾は、口唇と内面に沈線をめぐらし、外面には深い沈線で三段の文様帯を形成している。粗製土器は大体口辺から肩部にかけて二ないし三条の沈線を施し、しかるのち外面全体に縄文を施文した程度のもので、器形は甕形土器および台付土器が圧倒的に多い。

住居址の床面において発見された土器は、第一号址では炉址の近くで口径三二糎、高さ四七糎の甕形土器が横倒しのまゝ押潰された状態で出土した。口辺の内面に若干のふくらみがあり、外面は全体に羽状縄文が施されている。また胴部に凹みをもつ深鉢形土器が、炉址の東側から細片で発見された。この土器は口径一七糎、高さ一六糎あり、弧線と縄文をたくみに組合せた文様が施されている。口辺は波状口縁で大きく五つの波があり、しかもその頂部に突起がつくられている。

第二号址では、炉址の北側から甕形土器破片があらわれ接合につとめたが、器形をようやく知る程度で終つた。この土器は口辺の内面にふくらみをもち、外面の平行沈線内に縄文を施文した点など後期的な様相があり、関東地方の加曾利B式土器に類似する。さきの一号址発見の深鉢形土器および甕形土器も、器形、文様等からみて同時代にふくまれるものと

思う。

b、三角型土製品Aトレンチ第二層で出土した。短辺三・七糎、長辺四、四糎、厚さ一、八糎の二等辺三角形で、上半部の側面に片側から孔が穿つてある。

C、石器　発掘によつて出土したものは土器に比較して少くAトレンチの第二層で有茎石鏃一、磨製石斧破片一、Cトレンチの同層で石錐一、住居址の床面では一号址から磨石一、二号址は磨製石斧一、石小刀（石匕といわれていたもの）二、のみであつた。

このほか地主の木村氏が所藏していたものがある。参考までに記述すると、有茎石鏃九〇、磨製石斧三、独鈷石一、内反石刀二であつた。これらはすべて耕作中に発見したもので、鍬の先にかゝつたとすれば、多分第一ないしは第二層の上部に包含されていたものと考えられ、大洞A式に伴つたものと思われる。なお表面採集によつて玉砥石を一個採集した。

ホ、むすび　以上湯ノ沢遺跡の概要について略述した。発掘によつて二つの住居址を発見したが、諸般の事情を考えてわれ〳〵は満足している。次回には縄文前期の土器を出土する北東側の地点および南側の台地を調査して、本遺跡をより明にしたい。

調査した住居址は一号、二号ともに出土した土器から縄文後期後半のものと考えられる。さらにAトレンチであらわれた円形の落込みは、第一号住居址にともなつた貯藏庫あるいは貯藏穴であろうか、以後の当山麓調査においてもこの頃の土器を出土する遺跡から必ずといつてよい位みつけられている。本遺跡では黄色粘土を穴のふちおよび床に塗装してあつた。かつて昭和三〇年八月茨城県女方遺跡で、八幡先生と共にこのような穴を調査したことがある。内部には灰と多量の有機質土壌がつまつていた。そのときに先生から伺つたのであるが、埼玉県真福寺遺跡でも発見されたとのことであつた。

したがつてこのような穴は縄文後、晩期の住居址にのみ伴うものと思われる。

次に両住居址に共通するものとして、周壁と床面の接点に掘込まれた小さな柱穴がある。第一号では二四発見され、その中で半数に近い一一は床面の北東隅にあるが、第二号では北隅のみであつた。北東あるいは北風が強く、主柱を補強するための小柱であつたろうか。屋根の勾配をその角度からみて四〇ないし四一度とすると、高さは床面から第一号址が二、三〇米弱、第二号址は二米強となる。

床面の東南あるいは北隅で発見した踏石は、第一号址の場合、表面が平であつた。すぐわきに磨石の出土をみたので、石皿の用途をはたすものかと思つたが、東南隅にありこの方角を出入口として考えれば、北風ないしは北東風の影響もな

く好適であろう。これに反して第二号址は北隅にあり、出入口の踏石と考えるには条件が悪い。しかし南側は谷に面し、その傾斜も比較的急であるため、踏石と断定した。

(2) 薬師遺跡

本遺跡は岩木山の東南麓、海抜一六〇米の、北へ向つて張り出した舌状洪積台地に所在する縄文前期、後期ならびに晩期の遺跡である。地籍は青森県中津軽郡岩木村大字新岡字片付三三番地となつている。

遺跡は古くから地元の好事家、ならびに中高校生らによつて盗掘され、成田、戸沢両氏が訪れた頃は、いたるところその根跡がみられたという。

昭和三三年八月七日、さきの湯ノ沢と同日に本遺跡の下調査を行い、九月二〇日から発掘にかゝつた。

へ、Aトレンチ　遺跡の所在する舌状台地の中央部より若干北寄りの地点に、巾一、五〇米、長さ一〇米のトレンチを東西南北十字形に入れた。しかし一〇糎程掘ると、灰色粘土質土層となり、遺物もなんらみられなかつたため、本トレンチの発掘を打切つた。

ト、Bトレンチ　同日午後、台地の東端に近く、北より一八度西へふれて巾二米、長さ一五米のトレンチを入れBと名付けた。掘り下げてみると、ベースの灰色粘土質土層が、南へ行くにしたがつて凹凸はなはだしく、北は平坦で、トレンチの中央部より若干北寄りに二ケ処の落込みがみとめられたその一つは比較的大きく巾一、一五米、深さ七五糎あり、内部に黒褐色の土壌がつまつていた。この中には円筒形土器の破片がみられた。本トレンチの層は次のごとくである。

一層　黒色腐植土層　約二〇糎
二〃暗褐色土層　〃二五〃
三〃黒褐色土層　〃二〇〃
四〃灰色粘土質土層

遺物包含層は二層と三層である。

チ、Cトレンチ　台地東端の傾斜面に、東より南へ二〇度ふれて設定した巾二米、長さ二七米のトレンチである。調査の便宜上、トレンチの上部から下部へむかつて八区に分け、各区の間に土壌の落下を防ぐ目的で、巾五〇糎の掘残し部分を設けた。

層は表土から数えると、一区では最下層の灰色粘土質土層まで五層の変化がみられた。トレンチの中央部にあたる五区の層は、次のようであつた。

一層　黒色腐植土層　約一五糎
二〃　暗褐色土層　〃四〇〃
三〃　黒色土層　〃二五〃
四〃　黒褐色土層　〃二〇〃

五〃　赤褐色土層　〃一八〃
六〃　灰色粘土質土層

これらの層の中で第三層には炭の細片が多くふくまれ、遺物の量も他層より多かつた。この層は五区から七区まで続き六区にいたり厚くなるが、遺物の出土も層に比例して六区が多く、他区を圧していた。遺物包含層は二、三、四、五の層である。

リ、Dトレンチ　九月二六日、台地上西端に近く、北より東へ八、五度ふれて巾一、五米、長さ三二米で設定した。

層は北側が単調で、しかも浅く、Aトレンチと同様に最初が黒色腐植土層、つゞいて赤褐色土層であつたが、南側はやゝ複雑となり、とくに合地の基部を横切る空掘の附近は、はなはだしい。これはかつて空掘を掘つた際の土を盛つたためであろう。堀の内部には黒色腐植土が入り込み、現在深いところで一米、浅い部分で五五糎があが、横築のときよりくずれて浅くなつていると思う。遺物の包含は一層下部である。

ヌ、Eトレンチ　さきのDトレンチを掘り進めたところ、空堀のすぐ南側に石群を発見した。そこで拡張し、さらに当地区が直径一八米余の小丘をなしている点から、九月三〇日その中央部を横切つて東西に巾一米、長さ一一米のトレンチを入れ、東端はDトレンチにむすんでEと名付けた。層はトレンチの西側でみると次のごとくである。

一層　黒色腐植土層　約二五糎
二〃　暗褐色土層　〃二〇〃
三〃　黒褐色土層　〃二五〃
四〃　黒色土層　〃一七〃
五〃　暗褐色土層　〃一四〃
六〃　赤褐色土層

これに対して東側は黒色土層がなく、黒褐色土層がわずかにみられ、西では一、二〇米の深さにおいても確認できなかつた灰色粘土質土層が、わずか五〇糎余の深さであらわれた。したがつてこの小丘は中央部より西側にかけ、大きく層が傾斜しているのであろう。遺物包含層は二、三層であつた。

ル、Fトレンチ　さきの小丘を調査する目的で、九月二九日Dトレンチの南端から直角に西へ、Eトレンチの西端を中心として南北に、巾一米で設定したトレンチである。のちに小丘の周縁を巾一米でとりまいたため、それらをすべてFトレンチとして扱つた。引続き周縁から中央部のEトレンチへ向つて掘進め、最後は小丘全体を発掘し、Eトレンチもそのため無くなつた。したがつて遺物の採集と、整理の都合から発掘区の西端を基点として二米間隔で南北に分け、北側をN南側をSとして南北それ〴〵西側より区分けをしつゝ調査を進めた。その結果、層は各個所で異ることを知つた。たとえば黒色腐植土を例にとると小丘の東南部は二八糎、南部は八

糎西は一〇糎となり、西南部が薄く中央部と東部が厚くなるとの層以下はEトレンチに類似し、灰色粘土質土層は東部が浅く西部は深い。

ヲ、遺物　本遺跡から出土した遺物は縄文時代の土器と石器である。これをまず各トレンチの順序にしたがつて説明しよう。なお本遺跡の出土遺物は現在整理の段階で、昭和三十四年度の調査に追われ、未だ完了していない。したがつて調査中の所見が可成り加わるがお許しいたゞきたい。

土器Bトレンチでは二、三層から縄文晩期の土器が細片で発見された。中央部から若干北寄りの落込みからは前期の円筒下層d式土器破片の出土をみた。

Cトレンチは傾斜面のため、他のトレンチより出土量が多く、完形土器九、この内訳は深鉢形五、壺形三、高杯形一であつた。これらは五区から八区までの各区から出土し、その出土層は二、三層である。この種の土器の大部分は粗製土器で、精製土器は破損した注口土器が二個、六区の三層から発見された。出土した以上の土器破片は殆んど梱包してあり、二、三解いて洗滌してみると縄文晩期の大洞c2式であつた。このほか赤褐色土層からは円筒下層d式土器の破片が出土した。

Dトレンチでは一層下部から土器片が細片で発見された。

E、Fトレンチは二、三層から縄文晩期にふくまれると思う土器片が出土したが未整理である。e、石器、Cトレンチから有茎石鏃二一、磨製石斧二、石小刀九、石錐六、石剣片一、凹石一が検出された。これらは晩期の大洞C2式に伴うものと思われる。

Eトレンチは箆状石器と磨製石斧が各一個二層から出土し

Fトレンチでは有茎石鏃が一本発見された。

f、その他の遺物　Cトレンチのみから出土した。土偶破片五（二、五、六、七、八区）二、三層

鐸形土製品二、（五区）三層

有孔土版二、（五区）三層

岩版破片一、（五区）三層

ワ、遺構　FトレンチS四、五区には灰色粘土質土層へ直径五〇糎ほどのピットを掘り、なかに縄文前期と後期の土器をさかさ、あるいは立てゝ埋めてあつた。このほかS一区では赤褐色土層内に円筒形土器が横になつて発見された。このような状態で出土したものは全体で五例あり、その内訳は立つたもの四、さかさ一、横三であつた。これを縄文土器編年に照合すると、横の三例と立つたなかの一例は、器形文様からみて前期の円筒下層d式土器であり、残る四例は後期の甕形土器であつた。

g、爐址S一区の一層を排土中に礫が幾つかあらわれた。そこで丹念に周りから掘進めると、円形に配石され、礫の中

側の土は赤く焼けていた。したがつて爐址と思われる。このような例はもう一つ発見された。

h、石群　全部で六つある。そのなかから主な一例をのべよう。Dトレンチの空堀に面した一層から発見された。直径約二〇糎程の礫を置いたもので、なかには石皿の破片も二つ程みられた。この礫は岩木山麓各所にある複輝石安山岩である、おそらく空堀の土止めにしたものであろう。

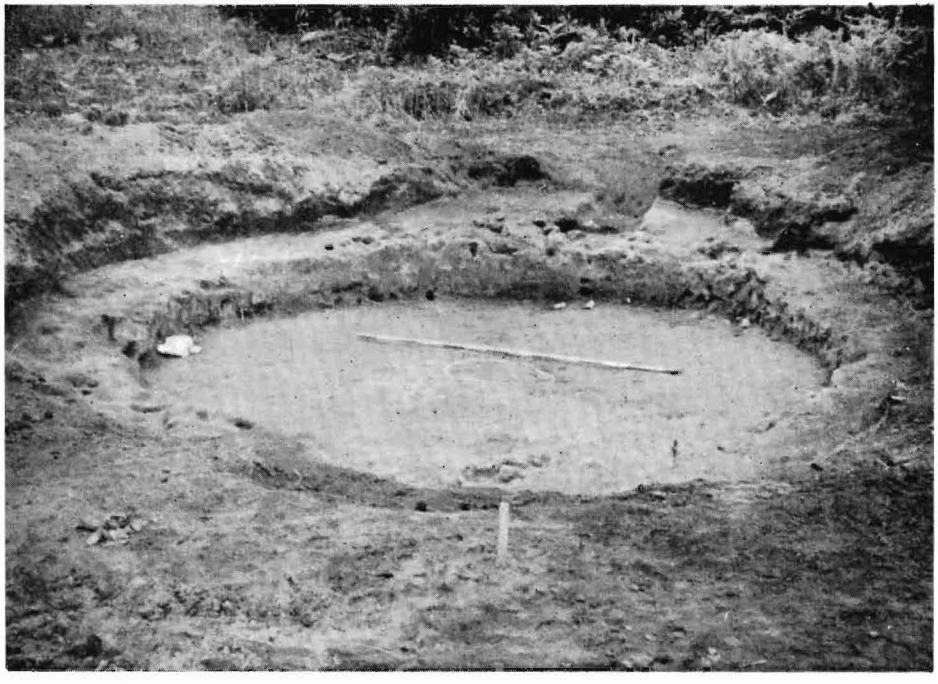
i、小丘全体に七つある。それを小さなものからみると、直径二〇糎×深さ二〇糎程度三、三〇糎×五〇糎二、四五糎×一五糎一、九〇糎×七〇糎一であつた。最後の大ピットは貯藏穴と思われるが、二、三番目のピットは柱穴として格好のものと考える。

カ、むすび以上葬師遺跡のあらましをのべた。発掘した結果あの広大な舌状台地へ縄文前期、後期、晩期の時代にはすでに人々が居住していたことがわかつた。だが彼等は今日われわれが想像するような平和に、そして安楽な日々を送つていたわけではない。なぜならば当時岩木山が活動中で、地鳴りあるいは噴火物により絶えず脅かされていたと思う。これに関しては発掘途時、弘前大学教育学部地学教室の酒井教授に同行を願い、トレンチ内部の層に関する地学的な成因について御教示をたまわつた。その結果、最下層にあたる灰色粘土質土層は洪積層であり、上の赤褐色土層はローム化しつゝある層で岩木山に直接関係がなく、二・三層の暗褐色と黒褐色土層は岩木山の噴火による火山灰堆積層とのことであつた。したがつて縄文前期末から晩期の中頃までに、少くとも岩木山の大噴火が二回はあつたと考えられる。

次に小丘からさかさあるいは立つた形で発見された土器についてのべてみたい。調査中種々の説があつた。しかし墓地住居の説がもつとも妥当と思われる。墓地説をとると土器の内部における土壌と周囲の土が相違する点からあるいは内部に燐性分でも入つているかとも考えられる。かつて南津軽郡浪岡町北中野天狗平および東津軽郡野内村久栗坂では後期の円筒形深鉢が群をなして埋沒していたという。（註）したがつてこれに類するものかとも思われるが、燐分析の結果をみないとわからないし、天狗平、久栗坂では人骨も出ているので同様とは断定できない、住居説は爐址、柱穴、貯藏穴の存在から憶測できる。

最後は空堀に関してのべてみよう。舌状台地の基部に堀られた巾四米深さ一米程のものだが、台地と結びつけて考えると、北海道各地でみられるチャシの様相をなしている。とくに周縁が傾斜地である点から一層その感が深い。台地上に住居を構え、合戦の際には屈強な防衛拠点であつたろう。

註、江板輝彌、先史時代Ⅱ縄文文化、考古学ノート、日本評論新社



湯ノ沢遺跡第一号住居址

参照　村越潔氏論文〔岩木山麓の発掘調査〕